

2018年度の学生相談室利用状況

橋本 和幸¹⁾

了徳寺大学・メンタルサポートセンター¹⁾

要旨

本稿は、2018年度1年間の学生相談室の利用状況を報告するものである。相談内容は、「自分が何をしたいかわからない」と「恋愛」に関するものが最も多かった。来談経路は、自分から思い立って相談員を訪れることが最も多く、次いで相談員の授業を受けたことをきっかけとするが多かった。

キーワード：学生相談室、学生相談員、利用件数、相談内容、中立性、受け止めること

2018 Report on student counselling usage

Kazuyuki Hashimoto¹⁾

Mental support Center Ryotokuji University¹⁾

Abstract

In this study we reported the use of student counselling during 2018. The content of consultation was the most common moratorium and romantic love. There were many voluntary consultations. Then there were many frequent visits to the consultation route triggered by receiving counselor's lessons.

Keywords: the student counseling office, counselor, the number of users, the consultation contents, third-party, acceptance

I はじめに

本稿は、大学内に設置された相談機関である学生相談室における2018年度の利用状況について報告するものである。学生相談室は、学生生活適応全般の諸問題について、当事者である学生の相談に応じ、教職員に学生への指導や対応の方法を助言する役割を担っている。具体的には、学生相談室の利用状況と今後の展望を分析することを目的とする。

II 学生相談室の基本情報

1. 学生相談室の開室状況

本学の学生相談室は、2018年度には3名の相談員が交代で1日に1人ずつ、毎週月曜から金曜の11時00分から19時00分までを基本的な開室時間にしていた。授業と兼務する相談員が担当する曜日は、授業時間の都合により開室時間が異なる時があった。

2. 相談員のプロフィール

3名の学生相談員のプロフィールは次の通りであった。

A相談員：非常勤。週2日勤務。授業担当有。

B相談員：非常勤。週1日勤務。授業担当無。

C相談員：教員との兼任。相談担当は週2日勤務、大学には週4～5日勤務。全学科の授業担当有。

Ⅲ 2018年度の利用状況

1. 利用件数

2018年度4月から3月までの12ヵ月間の学生相談室利用件数は、新規の申し込み23件、前年度からの継続面接3件、延べの面接回数は96回であった。前年度の2017年度は、新規の申し込み29件、前年度からの継続面接5件、延べの面接回数は93回であったため、新規申し込みと継続面接は減少し、延べの面接回数は微増した。

表1 開学以来の相談室利用件数

年度	2006年度	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
新規受付件数	3	16	14	10	18	16	6
前年度からの継続件数		1	7	3	5	10	11
延べ面接回数	26	118	206	220	308	421	127
教職員とのコンサルテーション					10	32	25
年度	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	
新規受付件数	9	27	18	15	29	23	
前年度からの継続件数	2	4	11	9	5	3	
延べ面接回数	90	151	164	127	93	96	
教職員とのコンサルテーション	27	27	19	17	6	11	

2. 来談経路

2018年度の新規申し込み者が学生相談室に来談したきっかけは、次の4種類であった。①相談員の授業を受けて関心を持ち自主来談7件。②それ以外の自主来談13件。③教員からの紹介2件。④保護者からの申し込み1件。

前年度よりも相談員の担当する授業を受けたことによる自主来談が減り、学生相談室の存在を思い出し、自主的に来談した事例が増えた。なお、ゼミ担当やアドバイザー教員が学生を連れてくる事例も引き続きみられた。

3. 相談内容

2018年度に取り扱った新規面接23件、および継続面接3件の合計26件を相談内容別に分類すると、次の6種類に分けられた。①「恋愛」6件、②「自分がやりたいことが分からない」6件、③「同級生との関係」5件、④「自己理解」4件、⑤「学修上問題」4件、⑥「指導者との関係」1件。

各カテゴリの具体的な相談内容は、次の通りであった。

(1) 恋愛

恋愛に関する相談は、大学やアルバイト先で気になる人が出来たという片思い、現在交際中の相手に対する不満、交際関係を解消するかどうか、すでに交際を終了している相手と連絡やつながりが切れないことへの不安などが主訴になっている。

(2) 自分がやりたいことがわからない

このカテゴリの相談は、1, 2年生が、ある資格を取得したくて入学したが、本当にそれで良いのかと思った、3, 4年生が、たくさんの授業を受講して複数資格を取るためにがんばってきたが、本当に自分がやりたいことが何かわからなくなったなどということが主訴になっている。

(3) 同級生との関係

本学の特徴として、学科の同学年と同じ授業を受講したり、授業内で演習や実技があったりするなど、大学でも高等学校以前のように密接な人間関係が存在することがある。このため、同級生との距離の取り方、グループの中に入る／入らない、あるいは入れないということ、自分の気持ちを同級生に上手く伝えられないなどを主訴に来談するケースが見られた。

(4) 自己理解

初回来談で「自分の性格を知るために心理テストを受けたい」と求めてきて、学生相談室に常備している文章完成法テスト (SCT)、矢田部・ギルフォード(Y-G)性格検査、絵画欲求不満テスト (PFスタディ)、エゴグラム、バウムテスト、ミネソタ多面的パーソナリティ検査(MMPI)、コーネル・メディカル・インデックス(CMI)、ラザルス式ストレスコーピング・インベントリー (SCI)など多種多様な心理テストの中から、学生に合わせて実施した。相談員が心理テストの結果を学生にフィードバックすることで自己理解が進み、それをきっかけとして、恋愛相談や自身の性格の悩みを語ることが多く、継続ケースに至る事例もあった。こうした相談は、昼休みや授業の空き時間に来談することが多かった。

(5) 学修上の問題

履修ミスや奨学金の借入／返済のこと等に迷った時に、学生相談室を訪れて不安を口にするケースが見られた。

(6) 指導者との関係

このカテゴリの相談内容は、授業や実習で指導者に対して持った疑問や不満を、相談員に話しにくるということであった。

IV 考察

1. 利用件数について

2018年度の新規受付件数は23件であり、学生相談室開室以来3番目に多い数字であった。一方で、延べ面接回数は2017年度と同程度であった。これは、問題の焦点化が上手く行き、比較的短期の面接で終結する事例が多かったためであると考えられる。

2. 来談経路について

2018年度の新規申し込み者が学生相談室に来談したきっかけを分類すると、学生相談室の広報活動の一環である「学生相談室便り」と「学生相談室リーフレット」を見たり、かつて見たことを思い出したりして来談する学生が多かった。目立たない広報活動を継続することの重要性が明らかになった。また、前年

度に引き続き相談員の担当する授業を受けたことによる来談が最も多かった。これは先行研究¹⁾²⁾が指摘するように授業が学生との貴重な接点となっていると考えられる。

3. 相談内容について

自己理解に関する相談で来談する学生は、2017年度と同様に³⁾、相談員が担当する心理学系授業の受講をきっかけに学生相談室を訪れていた。来室する学生の特徴についても好奇心旺盛でコミュニケーションスキルが高く、自分自身の心の内面に積極的に向き合おうとする姿勢が共通して見受けられた。

それ以外の事例については、2017年度と同様に³⁾、学生相談の「中立性」と「受け止めること」が支援のポイントになったと考える。つまり、学生相談員は教員と異なり成績評価に関与しないため、学生が教員には相談できないテーマも取り扱えるということである。

例えば、「同級生との関係」と「恋愛」は、他者との親密な関わりは青年期においてアイデンティティを形成するために重要な営みである⁴⁾。しかし、直接学業に関係ないことなので、高等学校以前に比べて関わりが薄い大学教員には一般的に相談しづらいテーマである。このため、「相談に乗ること」が仕事であると明記されている学生相談員の存在が、大学内で「受け止めてもらえる」という安心感につながる可能性が考えられる。

次に、「自分がやりたいことが分からない」と「指導者との関係」は授業や実習の指導者に対する思いであり、成績評価と直結する問題であるため、当事者である教員はもちろん、それ以外の学科教員にもどう評価されるかが気になって話しづらいテーマである。また、本学は全学部に学外実習が設定されているため、外部指導者との関係は教員よりもさらに相談しにくい問題である。この時に、学内の事情も分かっているがより中立的に接してくれる学生相談員は、学生にとって自分の悩みを理解して「受け止めて」もらえる可能性が高い貴重な存在と認識されているのではないかと考える。特に、「自分がやりたいことが分からない」ということは、エリクソン⁴⁾によれば、他者との関係と共にアイデンティティ形成に関わるテーマである。本学のように、取得した資格をもとに就職するという大学の在学学生は、大学入学時あるいはもっと前の高校在学時から、自分の生き方を決められており、「自我同一性獲得」や「早期達成完了」⁵⁾のように見える。しかし、大学に入って色々な人達と関わったり実習等で現場の様子を見聞きしたりすると、改めて迷いが生じることもある。こうした状況を「青年期ではよくあること」とあわてずに受け止める存在に、学生相談室がなっていたのではないかと考える。

最後に、「学修上の問題」はアドバイザー教員や事務局に早いうちに相談すれば、早期に解決する可能性が高いので、「誰でも悩む可能性がある」とノーマルな反応であると受け止めて安心させ、具体的な解決方法のために各計画書への相談を促すなどの対応を行うことができると考える。

V おわりに

1年生から4年生までの全学生1,140人に対して26件の相談件数は全学生数の2.3%にあたり、一般的な大学の学生相談で全学生の0.6～5%程度が来談するという先行研究⁶⁾と比較すると、中間程度の数の学生が相談室を利用していた。そして、2018年度多く見られた、自己理解へのニーズやごく短期間に軽減可能な心理社会的リスクの比較的低い相談に対して、授業での相談員の関わりや啓発活動としての「相談室便り」や「相談室リーフレット」が来談のきっかけ作りとして役立ったと思われる。相談室が身近な存在に感じられるようになることで、心理社会的リスクの比較的低い段階での早期対応による予防アプローチ・自己

理解による成長促進の支援に繋げることができたと言える。今後も継続して「気軽に来室できる」「敷居の低い」相談室になるように、相談室運営を工夫していく必要があると考える。

付記

開学から2018年度末まで学生相談室を支えてくださった、計5名の非常勤相談員（臨床心理士）の先生方に感謝いたします。

文献

- 1) 橋本和幸, 小室安宏 (2016) 新入生の学生相談の認知度と学生相談員が授業を担当することとの関連, 了徳寺大学研究紀要. 10, 23-29.
- 2) 吉武清實 (2010) 学生に向けた活動 1 - 授業への取り組み -, 日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会編, 学生相談ハンドブック, 学苑社, 東京. 168-184.
- 3) 小川歩・松本恭実・橋本和幸 (2018) 2017年度の学生相談室利用状況 了徳寺大学研究紀要. 13, 1-6.
- 4) Erikson, E. H. (1950) . Childhood and society. New York: W. W. Norton & Company. (仁科弥生訳 (1977) 幼児期と社会 1 みすず書房, 東京).
- 5) Marcia, J. E. (1980) . Identity in adolescence. In Adelson, J. (Ed) . Handbook of adolescent psychology. Wiley. pp.159-187.
- 6) 福田真也 (2007) 大学教職員のための大学生のこころのケア・ガイドブックー精神科と学生相談からの15章ー, 金剛出版, 東京.

2019年11月14日 受理

